

## 先覚者の知恵      カッパの小次郎

河童の小次郎(伝説名)小畦小次郎なる人いつの世にか小畦川の辺に住み、資源の乏しかった昔の村の共有蛋白源たる、川魚をみだりに、夜、こっそり一人占めにしようとする魚取りを姿を見せず「オイテケ、オイテケと言っていました。又大水のあとや、河の深いところは川泳ぎに行く子に「これこんな日に川に行くと河童の小次郎に引きずり込まれて、シリからハラワタを引きずりだされるぞ」と、つい大正年間迄子供の親にいましめるほど、危険な小畦川での川泳ぎに対する安全策を施した。つい、昭和初期迄、鯨井の大人達は、河童の小次郎として、伝説化して、みだりな負取り、危険な川遊びの防止を、小畦小次郎に、あやかり、事よせて、世のいましめとして、今日に至った。又、小字、番田の近くには、番田トーカ(狐)がいて、夜遅く其の近くを通ると、「番田トーカ」にばかされるから、夜は、早く帰っておいでと、番田狐に事をよせて、夜遅い外出をいましめました。夏、発光菌を持つ蚊の大群を、大八道と見なし若い男女の夜の外出にストップをかけた事も言い伝えられている。無智な時代は先覚者が大衆を架空なものに事よせて導いた時代であった。

以上鯨井史より抜粋      昭和58年3月31日 発行